
魔法って何？

夏香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法つて何？

【Zコード】

Z0852X

【作者名】

夏香

【あらすじ】

魔法の世界にある魔法学校。そこに通う一年生のシェラは特別な血を持つ魔女であった。シェラの通う学校では学科を自分で選択出来る仕組みになっている。シェラは誰も選択しない治癒学を選択した。その時からシェラの運命は動き出した。シェラが学校になじんできた時に事件が連続して起こる。それを誰かが流した噂でシェラがやつたことと濡れ衣を着せられて疑いの目を持たれる。だがシェラは気にせずに学校生活を過ごして行く。でも、本来ならば交わるはずのない悪魔が襲撃してきた。その襲撃は小規模で終つた物の悪

魔はシェラの持つ力とあるモノを欲しがっていた。その後も何度も襲撃をされ、戦争勃発まで行く。そして遂に悪魔と魔法使いの戦争が始る。シェラは戦争で傷ついた人の治療に当るが遂に悪魔に居場所を付き止められてしまつ。シェラは戦場にいって一緒に戦うが最後には死んでしまう。

過去の償いから未来へ

お願ひだから、もう繰り返さないでよ。
もう一度あの時と同じ様に繰り返す事があるなら…
私は全力で戦いに行きます
例えその行為が命を落とそうと…
それが私の最後だから…
いいのです

『魔法』っていう言葉は私が生まれたときから直ぐ側にあつた言葉。
魔女の血を受け継いでいる家系の中で私の祖母と母と私は特別…い
や、特殊だった。

それを知っているのは、祖母と母と仲が良かつた三人。
三人は仕事関係で繋がっていた人だつた。
私は彼らの顔も知らなければどんな人なのかもしらない。
ただ、知っているのは祖母と母と仲が良かつたことだけ。
でも、身近にいるなんて知るよしもなかつた。
身近にいる事を知るきっかけになつたのはつい最近のこと、でもそ
の前に今までのことを見つめてみよう。

桜の花びらが舞う頃、私はココ『東魔法学校』に入学した。何故、ココが、『東魔法学校』かというと、学校を創設した人が東の魔女と呼ばれていた人らしい。だから、『東魔法学校』となつたの。入学校式も終わり、私達一年生はそれぞれのクラスに戻つていた。私のクラスはグリーン。クラスの名前は全てカラーで分けられている。一年生は三クラスしかないから、レッドにグリーンにブルーしかクラスがない。クラスに戻ると早速先生がやってきた。

「席に着いて。」

男の先生がそういうとみんなはガヤガヤしながら自分の席についた。「みなさん、初めまして。私の名前はリューといいます。担当する教科は魔法の歴史学を担当します。よろしく。それじゃあ、早速配る物があります。」

先生がそう言つて、杖を振つた。

すると、プリントや配布物が宙に浮きそれぞれの先頭の人の机の上に人数分置いていった。みんなは「凄い！」「わあー。」となるけど、私にしてみれば当たり前のことだった。配られてきた物に目を通しながら見ていると、隣の男の子に声を掛けられた。

「ねえ、なんていうの？」

「え？」

「名前。」

その男の子はちょっとクセ毛混じりのグラウンの髪の色をした何ともやんちゃそうな男の子だった。

「シエラ、だけど。」

「よろしく。俺はセリュウ。」

「よろしく。セリュウ。」

「よろしくな、あとで友達紹介していいか？」

「いいけど。」

セリュウに友達を紹介してもらつ約束をし、私は再びプリントに印をやつた。

「それじゃあ、配られたと思うので説明するぞ。」

先生の説明が始つたが、暇で暇でしじうがなかつたからプリントの隅に絵を書いて遊んでいた。しばらくして先生の話も終り下校時刻になつた。ココの学校に来る生徒はみんな寮に住んでいる。それぞれクラスで分けられているが私は別になつている。これも“特殊”であるから学校側が配慮したこと。先生が終わりの挨拶をしてみんな荷物をまとめて寮に行く。みんなと同じタイミングで行くと玄関が混むことを考えて、私はしばらく教室にいた。

「ショラ。」

「ん？」

呼ばれた方を向くとセリュウと見かけない男子が一人いた。

「さつき言つてた友達。」

「ああ。」

一人はオドオドしている子、もう一人は生意気そうな子。という印象を受けた。

「はじめまして。俺はリュウ。」

「は、はじめまして。僕はメリュ。」

「はじめまして。私はシェラ。よろしくね。」

すると先生がやつてきて「はやく下校しなさい。」と言われた。

私とセリュウ達は玄関に行き靴を履き替え学校を出た。

「それじゃあ、また明日ね。」

「え？ ショラは寮じゃないの？」

「うん、ちょっとね。それじゃあ、また明日ね。」

「う…うん。」

私はセリュウたちを別れてから急いで向かつた先は私がこれから住む場所である“チエリー工房”

「遅くなつてスイマセン。」

玄関のドアを開けてそう言つと見覚えのある顔の人人がいた。

「シヨラ、よく来てくれたわね。」

「ラズさん。お久しぶりです。」

私がラズさんと呼んだ人は、学校の保健医の先生と私の先生。私はこれからラズ先生に勉強を三年間教えて貰う。

「とりあえず、入つて。」

「はい。」

工房に入るとそこは普通の家と変わらなかつた。

「今日から一人暮らしね。」

「え？ 他の人は？」

「あれ、シヨラ一人のはずよ。」

「でも、手紙に…。」

私はラズさんに手紙を見せた。

ラズさんは手紙を見ると「あ～」と言つて何かを納得していたようだつた。

「シヨラ、この手紙ね間違つているのよ。□□で生活するのはシヨラだけよ。」

「え？？」

「あとで間違えた人が来るわ。んで、シヨラとりあえずランチにしましょ。」

ラズさんがランチを用意していて食べる事になつた。
ランチを食べながら楽しくお喋りをしていると一羽の鷹が飛んでき
た。

鷹は口にくわえていた荷物を下ろすと飛んでしまつた。

「ラズさん、それは何？」

「これは、あなたの白衣よ。」

渡された箱を開けるとシヨラとピンクの刺繡が入つた白衣だつた。

「ラズさん、ありがとう。」

「いえいえ。その白衣は実験の時に使つてね。」

「うん。」

ラズさんから白衣を貰い心が弾んでいるとピンポーンと音がなつた。

ラズさんが玄関に行つている間、私は白衣を眺めていた。

「ショーラ、ちょっとといい？」

「うん。」

ラズさんに呼ばれ別の部屋に行つた。

「どうしたの…あ！先生。」

先生は「ショーラだったのか。」と言つ。

「どうしていんの？」

「ショーラ、落ち着いて。まず座つて。」

ラズさんの隣に座り向かえにいる先生と他の二人の人を見た。

「まず、僕以外の紹介をしなきやね。」

先生がそう言うと女の人自己紹介をした。女の人はヨーリつて言つて古代の歴史学を教える先生らしい。ヨーリ先生が紹介し終るともう一人の男の人が紹介した。その人はリーウュウというらしい。スポーツ学の先生らしい。紹介が終ると先生が口を開いた。

「单刀直入に入らせて貰うけど、君は特殊なんだね。」

先生がそう言つた瞬間、私の頭に血が上つた。

「私は、特殊じゃない！！」

そう言つて私は部屋を出た。

「ショーラ？！」

部屋を飛び出し外に出た。

しばらくの間、“特殊”つて言われていないせいか“特殊”という言葉につい頭に来てしまつた。“特殊”だと分かつていても、どうしてもそれを受け入れたくない自分がいた。もし、未来を変えれるんだとしたら“普通”にしてほしい。そう強く願うだろう。

部屋を飛び出して外に来てしまつたものの自分がどこにいるか分からなくなってしまった。辺りは真つ暗な場所だった。

「どこだろう？」

すると足下にボールが転がってきた。それを拾い上げようとした瞬

間…。鋭い閃光がはしつた。

「何者だ？！」

私は自分の身に起こっている事が理解出来ずにいた。するともう一度閃光がはしった。

「止まれ！」

「うるさい！ライト・サークル」

持っていた杖で閃光のきた方に打つた。しばらくして出てきたのは赤い閃光だった。

（やばい、これ逃げた方が絶対いい。）

私は森の方に逃げた。

それでも敵は追つてくる。

「ルーン・ライト」

追つてくる敵に呪文で対抗する。

「サーテル・ライン」

相手の呪文が杖を持つていた右腕に当つてしまつた。

（あちやつ…）

呪文が当つてしまい血が流れている中、光が集まつている所を発見した。私はそこに向かつて全力で走つた。相手からの攻撃を上手くかわしながら光のある方向に出た瞬間、ずっと暗くて見えなかつた相手が見え私は咄嗟に杖を構えた。相手も杖を構えて、同時に呪文を放つた。

「ブルー・レイン」

「サテール・レイン」

青く鋭いラインと赤い鋭いラインが一気に激突したが相手の力が強すぎて私の方に跳ね返つてしまつた。

（ヤバイ…）

呼吸することも忘れかけていた時、目の前が暗くなつた。

「そこまで、シュー・キ。」

そう言つた人はさつき飛び出した部屋にいたリーウ先生だった。

「大丈夫か？」

「え？」

先生が振り返えつて言つ。

「大丈夫……す。」

私はそう言つた時、目の前が暗くなつてしまつた。

「ちよつ、大丈夫か？」

「先生、その子の右腕が。」

リーウは右腕を見るやいなや直ぐにラズの元に向かつた。

「ラズ、シェラが！」

運良くラズがいて薬の調合をしていたため見つけることが出来た。ラズはシェラの傷を見て直ぐに緊急の治療を行つた。治療は長い時間行われて、ラズが処置室から出てくる頃にはもう辺りは薄暗くなつている頃だつた。

「ラズ、シェラは？」

「大丈夫よ。でも傷がね。」

「傷がどうかしたのか？」

「傷跡が残つちゃうかもしれないのよ。それと、あんな傷を受けるのは上級生の呪文かもしくは、力しかないわ。何があつたの？」

「シュー・キの呪文を受けたらしい。」

「ちよつ！シュー・キ君になんで？」

「立ち入り禁止の森に入ったボールを取りに行こうとして、でボールが転がつた先にいたのがシェラで立ち入り禁止の森で出るモノと間違えたんだつて。」

ラズは「はあ～」と溜息をついた。

「リーウ先生、幾ら何でも気を付けてください！せっかく、入学して間もないのに。それにシェラがこの先ちゃんとクラスメイトたちと馴染めるのか不安なんですか？」

「ん～、大丈夫だよ。」

「どこが？！？」

「何かあつたら何とかするから。」

そう言つてリーウは出て行つた。

波乱の続き

田を覚ますと白い天井が見えた。
消毒液の匂いが鼻をかすめた。

（あれ…なんで寝ているんだっけ？）

そう思い体を起こすと窓から太陽の光が入っていた。

「シーラ、調子はどう？」

白衣を着たラズさんが朝食を持って入って来た。

「何がありましたっけ？」

「覚えてないの？ 昨日、上級生と呪文の「あー思い出した！…」（そうだ！ 昨日、森で見つけたボールを拾つて誰かと呪文のやりあいになつたんだ！）

「シーラ、今日はびつある？」

「え？」

「ホントは学校の時間なんだけど…」

「どうしよう…」

「一日休んでもいいのよ。」

私は考えた結果、途中から行くことにした。

「よし、そしたら、朝食食べてね。それと制服届いてるわよ。あと朝食食べている間傷の手当させてね。」

「傷？」

「昨日、上級生の呪文受けて右腕に大きな傷を受けたのよ。」

サンドイッチを食べながらラズさんが私の右腕の包帯を取つていく。モキュモキュとサンドイッチを食べているとラズさんが「え…」と驚いた。

「どうしたんですか？」

「傷が治つてる。」

「あ、ホントだ。」

ラズさんは右腕をじつと見つめていた。その間にサンドイッチを完

食した。

「ラズさん、制服どこですか？」

「…あ、ここよ。」

ラズさんから制服の箱を受け取り、制服を取り出した。

「あ、可愛い。」

私は早速着替え、鏡の前に立った。

「わあ～、可愛い。」

「シェラ、似合ってるわよ。それと、お弁当作つといたよ。」

「ありがとうございます。」

お弁当を受け取り鞄に入れて学校に向かった。

入学して初めての日なのに途中から行くという形になつて、少しシヨツクだつた。靴を履き替えてクラスに向かっている最中に運良く休憩の鐘がなつた。

（良かつた）

教室のドアを少しだけ開けるとみんなワイワイガヤガヤやつていて入りやすかつた。

自分の席に行き鞄を置くとセリュウが声をかけてきた。

「シヨラ、おはよう。今日は遅れてきてどうしたんだよ？」

「ああ、具合悪くて。」

流石に寝坊だなんて言え無く、咄嗟に嘘をついた。

「大丈夫か？」

「う…うん」

するとメーリュとリュウが何かを持ってやって來た。

「おはよ。メーリュにリュウ。」

「はよ。」

「おはよ。」

「何持つてるの？」

メーリュに見せて貰うと何かの予定表だつた。

「フットボール？」

「うん。部活の予定表だよ。」

「へー、部活ね。」

「シーラは何部に入るんだよ。」

リュウが聞いてきた。

「私は入らないよ。」

「何でだ? マネとかは?」

「やらないよ。楽な方が好きだし。」

メーリコはさつきのプリントをセリュウに渡した。すると休憩終了の鐘が鳴り、みんな席に着いた。窓側でぽかぽか陽気に包まれている教室は暖かく寝ることは最高の場所だった。

私は気配を消して寝た。

「シーラ、シーラ。起きてよ。」

「ん、もう少し。」

「お昼になつたよ。」

「ん!...起きる。」

田の前にリュウがいて両隣にはセリュウがいた。

「起きたか、メシ行くぞ。」

リュウに言われて屋上に私達は行つた。適當な場所に座つて昼食をとつた。

「ねえ、さつき先生何の話してたの?」

「え? お前聞いてなかつたの?」

「寝てた。」

「...!...!...!」

「ずっと寝てたのかよ。」

「ただけど。ねえ、リュウ、タコさんワインナー頂戴。」

リュウが「いこよ。」とこう前にタコさんワインナーを頂戴した。

「あ、お前!」

「まあまあ、明日なんかあげるから。」

「全く。」

四人で楽しく弁当を食べながら話をしていると上級生の人が私達の元にやつて來た。

「よ、仲良し…四人組?…」

「「「こんなにちわ。」「」」

「こんなにちわ。」

セリュウ達は慌てて挨拶をした。そのワンテンポ遅れて、私も挨拶をした。

背が高い四人の同級生はどうやら三人の先輩らしい。

「なあ、シユーキ。昨日、森から出でてきた子。」

「え?…」

私はお弁当を食べ終えて包みに包んでいた。

「ねえ、名前は?」

「え?」

「名前。」

「シユーラです。」

「シユーキだ。…その、昨日はすまない。」

「何がですか?」

「腕にケガをさせてしまった。」

「大丈夫ですよ。あと残つてませんから。」

そう言つて、シユーキさんに腕を見せた。シユーキさんも驚いていた。

「シユーキ、どうかしたか?」

「シユール、治つてる。」

「良かつたじやないか。」

シユーキさんの隣にいた人はそつ言つた。

「?」

「お!シユーキ達じやねえか。」

「先生。」

「お!昨日の……」

「シユーラです。」

「シユーラです。」

「そうそう。」

リーコウ先生がニシシと笑いながらこっちに来た。

「傷は大丈夫か？」

「もう平氣ですけど。」

「そつか、よかつた。じゃあ、マネージャーな。決定！！」

「え？」

「「「えええ！－！」」

「嫌です。」

私は断つた。只でさえ“特殊”って事を気付かれたくないのに…。

「もう決めたもん！」

「い・や・だ！」

「先生兼監督命令です！」

ムツときた私はつい魔法を使つことになる。

「やめてくれませんか？幾ら先生の言つた事でも嫌なものは嫌なん

です。」

「だつてー。」

「いい加減にしてください。そう簡単に言つあなたに何が分かるんですか。普通でいたい人の気持ちなんて分からぬでしょ。レイン・サーティー」

私は霧を身に包めその場から消えた。

で身を消したことは良かったが……お弁当箱を残して来てしまったことに気が付いた。

（困ったよ……置いて来ちゃった。）

すると、セリュウ達が降りてきた。

「あ、シヨラいた。」

「セリュウ。」

「はい、弁当箱忘れるなよ。それにしても、やつきのひの魔法？」

「ありがとう、うん。」

「スゲえ。」

セリュウは驚いている、リュウも関心しているメーリュウはキラキラした瞳をしていた。

「いめん、私用事あるから。」

そう言つて教室に入り鞄の中にお弁当箱を入れ教室を出た。

「シヨラ、帰るの？」

メーリュウは少し不安そうに聞いてくる。

「つうん、ちよつとね別な所に行くだけよ。じゃあ、また明日。」

私はそう言つてチヨリー工房に戻った。

ラズさんにばれないように玄関に入つて音を立てずに自分の部屋に行く。

「ふう。」

昨日、ラズさんに部屋を教えていて貰つたから良かったと思い、鞄を机の横に掛け制服から私服に着替えてベッドに横になった。

「魔法……か。」

私は魔法を使わなければ良かつたと後悔した。

“特殊”だったせいなのか魔法が使えるのが他の子より早く、本で読んだことを一回でほぼ覚えているということがあり昔から関心さ

れる一方で気味悪がられた。母はそれを私にばれないように頑張つていたが私は知つていた。

『コンコン』窓を叩く音が聞こえ窓を見て見ると鶯がいた。窓を開けると私は窓の近くにあつた止まり木に止まつた。

(なんだろう?)

ワケが分からぬ私は窓を閉めようとした時だつた。

『おい、閉めるなよ。』

『……鶯が喋つた!/?』

『俺だつて喋るわい。つでかココの生き物は大半喋るし。』

『……』

『無反応かい!…!』

『……いや、あまりに…うつん。何でもない。』

『お前はあまり驚かないんだな。』

『さつき、驚いたでしょ。』

『普通の生徒だつたらメッチャ驚くケド。』

『もつと驚いて欲しかつた?』

『そんなんじやね~よ。』

『フフフ、そう。』

私は鶯との会話につい頬が緩んだ。

『そういや、お前、名前は?』

『シヨラよ。あなたは?』

『ワツシー。』

『……』

私は必死で笑いを堪えた。

『おい、笑うなよ。』

『だつてえ、そんなネーミングセンスのない名前…ププ…』

『しようがないだろ…名前思いつかなかつたんだから。』

『自分で決めたの?』

『ああ、そうだよ。』

『親は?』

『親は?』

『 いなによ。とっくに死んじまつた。』

私はワッシャーにいけない事を聞いてしまつたと思い「ゴメン。」と謝つた。

『 別にいいよ。とにかく、お前学校は?』

「早退。」

『 する休みだな。』

「違う!…違うもん。する休みだつたら、どれだけいいか…

『 …どうかしたのか?』

私は体育座りをして顔を埋めた。

『 …おい、何があつたんだよ。』

その時だつた、ドアを「ン」と叩く音が聞こえワッシャーはどうかへ飛んでいつてしまつた。

「シエラ?帰つてきたの?」

私は慌てて杖を使い霧を出し身を隠した。

「アレ? いな。変ね~。」

その時、私は森の中にいた。ここは学校には森が一つあり、昨日のいた森とは別な森にいた。そこはかつて、私がが住んでいた家がある森だつた。

「お、懐かしい。確か、家まだ残つてゐるはず。」

私は家までの道をうる覚えながら歩いて行つた。
しばらく歩くと一つの小さな小屋が見えてきた。

「あ!」

私は小屋を見つけると走つた。

ドアの前に立つてドアノブに手を掛け引くとドアが開いた。

家の中に入り昔を思い出す。

埃が積もつていて息苦しく直ぐに小窓を開けた。

「ふう。」

久しぶりに来た我が家は私が出て行く時と変わらなかつた。
空気の入れ換えをしながら棚に上がつてゐる写真を見た。母と祖母と写つてゐる写真や母とや祖母との写真が少ないが残つていた。

「懐かしいな。」

写真を見ながら本棚を見ていく。そこには祖母や母が研究に使つて
いた本がたくさんあつた。手に取り埃を払い中身をパラパラ見る。
私はやっぱり似てゐるんだなつて思う。祖母や母が薬草学に興味が
あつたように…。私はしばらく椅子に座りボーッとしていた。する
と何者かが来る気配がした。

私は直ぐ気配を消して家を出て鍵を閉めた。

数人の刺客であらう者がキヨロキヨロしていた。

「あんたら何者?」

「！」

「刺客なんて良い度胸じやない。」

私は杖を構えた。

「貴様、何者だ。」

「何者つてあんたらの方が何者?」

「貴様に言う必要は無い!」

「じゃあ、私も。」

そう言つた時だつた。相手から呪文が降りかかつて來た。

「わッ！いきなり危ないじやない。」

するとまた攻撃がかかってきた。

私はそれを避けて呪文を言つ。

逃げながら呪文を言い相手は追つて来ながら呪文で攻撃する。
長時間、同じ事を繰り返していると体力が無いのか段々逃げるスピ
ードが落ちて来てしまつていた時、刺客らしき者が三人に増えた。
(あちやー、どうしよう。)

私は一瞬の隙を相手に見せてしまい呪文に引っかかてしまい木か
ら落ちてしまつた。

その拍子に服のフードを被つてしまい前が見えない状態だつた。

「痛つた。」

周りを刺客に囲まれて危機的な状況。

「貴様、先ほどあの小屋で何をやつていた?」

「教えない。」

「答えなければどうなるか分かっているのか……」

「……死が待っているだけでしょ。」

そう言つてフードを取つた瞬間だつた四方八方から呪文が一斉に降りかかつた。

(あ…やられる)

そう思つた瞬間に脳裏に過ぎつた言葉。それをいつの間にか私は唱えた。

「ライン・リフレイン」

すると青い魔方陣が出てきた。だが、魔力がまだ弱いせいでの相手の攻撃が当らうとした瞬間、どこからか別の魔法がかかつてきた。

「何者? ? ? !」

「何者つてことは無いだろ? 」

木の影から現れた人は黒いマントを身につけていてオジサンだつた。

「お前らやめる。サラキだ。」

「「「これは失礼! ! ! 」」

そう言つて刺客はその人の横についた。

「お嬢さん、ケガはないかい? 」

「はあ、ありませんけど……。」

オジサンの顔が少し近くにあって……どうすればいいか迷う。

「サラキだったのかよ。」

「あ、リーウ。それにユーリにリュー、どうしたんだよ。」

「どうしたつて、森のアノ小屋に侵入者が入つたつて連絡が入つたから……。」

リュー先生はそうサラキつていう人と話している。私の事にはどうやら気付いていないようだ。

「お前らさ、侵入者の顔を確認しろよ。」

そうサラキつていう人が言うと先生達は私の存在に気付いた。

「……サラキ、もしかして。」

「そのもしかして、お前らは自分の生徒を狙つていたんだぞ。」

サラキが怒つていった。

「全く、お前らはな」。

そうサラキが言うと三人は反省した。

「すまないな。危険な目に遇わせて。俺はサラキ。お嬢さんは？」

「ショラ。」

「もしかして…“特殊”な力の家系の子？」

「…そうですけど。」

「やっぱり…一年生での魔方陣を出せたら凄い。」

「…それは、ありがとうございます。」

私は“特殊”という言葉からはどうしても逃げられなかつた。

（この人も…みんなと同じだ）

「お前らは帰つてよし。それと、しばらくぶりに帰つてきたから報告することもあるし。」

私はその場からこつそり逃げようと思い方法を考えた。
そして、杖を構えて霧で姿を消そうとした時だつた。

「待つた。」

サラキさんに手首を掴まれた。

「どこに行くの？」

「なんですか？あなたには関係ない。」

「関係なくないよ。だつて、こここの先生ー」

パン

私はサラキさんの頬を平手打ちした。

「先生？聞き捨てなりませんね。“特殊”扱いする者が先生と名を名乗る。良い度胸していますね。刺客まで持つて。」

私は、自分で感情を止められ無かつた。

「ショラ、何て事言うんだ！」

「今更、何を言うんですか。生徒一人の気持ちも分からぬ先生が何を言つ…。私がココにいる意味つて何？何ですか？」

私はそう言つて霧に身を隠し消えた。

残つた先生達は呆然としていた。

「流石に痛いな。」

「何よ、こつちは守るつもりでいるのに!」

「まあ、ユーリ落ち着いて。」

「…もしかして、それが嫌なんじゃないのか?」

リーウェウが言った。

「特別扱いが嫌なのか…。」

「そういうば、“特殊”って言葉に敏感なのがも。」

「頬が痛い。」

四人は何となくショーラの気持ちに気付きその夜、話し合いが行われた。

私は姿を消してから一人学校のグラウンドにいた。

波乱が收まりつつあります

グラウンドに来た私は人を発見した。そこにいたのはメーリュだつた。メーリュは無邪気にボールを蹴つていた。その姿は、幼い子どもの様な姿で微笑ましいと同時に羨ましいと思つた。

「ヤツホー、メーリュ。」

私はメーリュに声を掛けた。

「…あ、あ、シエラ。」

「よつ…」

「あ、いやこれは…その、違うんだ！別に忍び込んで…やるつもりじゃ。」

「メーリュ、何言つてるの？」

「えつと…その…」

「大丈夫だよ。私、先生に言わないから。」

そう言つとメーリュはホッと胸をなで下ろした。

「ねえ、メーリュこっち来て。」

「う…うん。」

メーリュは私の隣に座つた。

「練習？フットボールだつけ？」

「うん。みんなより上手く無いから。」

「偉い偉い。」

私はメーリュの頭を撫でる。

メーリュは頬を赤くした。

「メーリュは良い子。上手くなるよ。」

「あ、ありがとう。」

「羨ましいな。」

私はつい言葉を漏らしてしまつ。

「なんで？シエラは何かやらないので？」

「そうだね～」

私は科学者みたいに悩む素振りを見せて「やらないよ。」と答えた。

「なんで？」

「やりたいことない！」

私は少し威張つて見せた。

「そうなの？せっかく、魔法が使えるし何かやらないの？」

「頭が良くてもね、魔法が使えても意味が無いんだよ。」

「…え？」

メリュは首を傾げて私を見た。

「メリュ、普通である事を楽しみなさこよ。」

「？」

ますます首を傾げるメリュに私は少し苦笑し来ていたフード付きのマントをメリュに着せた。

「ありがとね、話に付き合つてくれて。体、冷やすんじゃないよ。」

そう言って私はまた姿を消した。

その場に残ったメリュは練習を再開せずにボールを片付け練習を終了させた。

再び私は姿を消し戻つて来た場所は自分の部屋だった。窓を開けていたお陰で自分の部屋に入ることが出来た。

私は窓を閉めて勉強机の椅子に座つた。

（明日からは気配を消そう）

そう思つて居ると窓をノンノンと鳴つた。窓を開けるとワッシャーがいた。

「どうしたの？」

『いやあ、どうじているかなつて思つてな。』

「ふうん。」

『なんだよ、何かあつたのか？』

『何にも無いけど…』

『さつきの光の森であつた事件知つているか？』

「へへ。」

私は知らないふりをした。

『アレ、お前だろ。』

『知らないよ。』

『そつか、そしたら俺の勘違いだな。』

ワッシーはそう言った。

「ねえ、ワッシー。」

『なんだよ。』

「もし、ワッシーが他の鷺より何か特別な力があつたらワッシーはどう?」

『どうつて?』

「たとえば、誇りしいとか…」

『あ～、そうだな。力があれば嬉しい時があるがな。でも、いつかはそれが役に立つときが来るからそれまで頑張るかな?』

「へ～。」

『何でそんなこと聞くんだよ?』

「何でもないよ…。ただ…聞いてみたかっただけ。」

『なんだよ～』

「普通でいたいよ。」

そう私は呟いて顔を埋め目を瞑ると、不思議と意識が遠くにいった。

『はあ～』

「なに溜息ついてんの?」

『悩める子だぞ。』

『そうね。今日、学校から途中で抜け出したらし…それに森でも…』

『ヤツパリそ娘娘だたのか…』

『特殊っていう事は周りからみれば光っている存在なのかも知れないけど、この子にとつては嫌なものなのよね。』

『ああ、コイツの母もその母親も皆、特殊を嫌っていた。でも、こうも表に出すことは無かつたがな。』

『さうね。でも、もしかするとコランもサランも嫌だつたのかもね。』

『

『かもね…。ねえよ、嫌だつたんだよ。ずっと最後まで死ぬ最後まで嫌だつたんだよ。』

「リランもサランもいつもニコニコしていたから平気だと思つてたけどそうじゃないのよね。気付いてあげていれば…もっと人生は変わつたのよね。」

ラズはショラに掛け布団をかけてそっと部屋を出た。ワッシーはずつと止まり木にとまって寝ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0852x/>

魔法って何？

2011年11月12日13時47分発行